

令和元年6月14日現在

機関番号：12101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02470

研究課題名(和文) 言語接触による統語変化の理論的研究

研究課題名(英文) Theoretical studies on contact-induced language change

研究代表者

西山 國雄(Nishiyama, Kunio)

茨城大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：70302320

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、言語接触による統語変化のメカニズムを理論的に明らかにすることを目的とする。主に所有名詞の語順変化を扱い、これを文レベルでの語順変化と平行的に分析する。文レベルでの語順変化が動詞上昇の消失により発生したという先行研究を拡大して、所有名詞の語順変化は名詞上昇の消失によることと分析する。これにより主要部名詞 所有者の語順から所有者 主要部名詞の語順へ変化したことが説明できる。また名詞上昇の消失は、東インドネシアにおいてオーストロネシアとパプア言語の接触により起こったと説明する。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究により、統語理論を使った通時的分析が、言語接触を中心とした言語変化の分析と合致することが明らかになった。文レベルでは、オーストロネシアがSV0になったのは、主語中置型の言語との接触が原因だという説があるが、これは動詞上昇消失分析と合致することが先行研究で示されている。これと同様に名詞句レベルでも、名詞上昇消失分析はオーストロネシアとパプア言語の接触の仮説と合致する。理論的研究と言語接触の研究は独立して行われることが多いが、本研究はこの2つの流れが合流する方向性を示せた。

研究成果の概要(英文)：This study is concerned with the mechanism of syntactic change induced by language contact. It mainly deals with the change in word order in possessive noun phrases, and analyzes it in parallel with the change of word order at the clausal level. Extending the hypothesis of a previous study according to which the loss of verb raising gave rise to the change of word order at the clausal level, I analyze the change of word order at the nominal level is due to the loss of noun raising. This captures the change of head noun-possessor order to possessor-head noun. Another point of the study is that the loss of noun raising is due to the contact between Austronesian languages and Papuan languages.

研究分野：言語学

キーワード：文法化 機能範疇 ラマホロト語 一致 所有名詞 動詞形態論 助動詞 言語接触

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

従来言語接触は、ピジン・クレオールを典型としてこれまで社会言語学の枠組みで研究され、あまり理論的説明は試みられなかった。しかし近年、言語接触による言語変化も文法化のパターンに従うという仮説が出て、原理なことを求める気運が出てきた。文法化とは、言語変化の過程で動詞や名詞などの語彙範疇が、助動詞や決定詞などの機能範疇に変化することを指す。文法化の研究は類型論から始まったが、生成理論を用いて文法化を説明する手法が定着しつつある。こうした研究動向を背景に、本研究では言語接触による統語変化のメカニズムを研究した。

2. 研究の目的

本研究は、言語接触による統語変化のメカニズムを理論的に明らかにすることを目的とした。具体的には、パプア言語の影響を受けているオーストロネシア語族のラマホロト語の統語変化を分析することを通じて、文法化研究と生成理論の発展に寄与することを目指した。扱う統語変化は、一致形態素の発達、所有名詞の位置変化、助動詞の位置変化の3つで、ラマホロト語を中心に、通言語的なデータも参照しながら、理論的分析を進めた。東インドネシアのオーストロネシア言語は近隣のパプア言語の影響を受けた文法的特徴をいくつか持ち、ラマホロト語もこれに含まれる。ラマホロト語では等位接続語が一致形態素を持つことを示すが、この珍しい現象は、パプア言語でも見られる。また所有者は主要部名詞の前に来るが、これは他の地域のオーストロネシア言語とは逆の順序であり、パプア言語のそれと一致する。さらに助動詞が動詞句の後に来るが、これもパプア言語のそれと一致し、他の地域のオーストロネシア言語では見られない。これらはパプア言語との接触によりもたらされたと考えられ、これがラマホロト語を研究する意義である。

3. 研究の方法

言語接触が言語変化に果たす役割の解明には、具体的事例の共時的分析、周辺言語との比較、他の語族における言語接触の理解の作業を行った。では一致形態素の発達、所有名詞の位置変化、助動詞の位置変化の分析を行った。ではパプア言語やムナ語などとの比較を行なった。では日本語の連用形を考えることでアルタイ語族仮説の中での日本語の言語接触の考察の道を開く。

4. 研究成果

本研究により、統語理論を使った通時的分析が、言語接触を中心とした言語変化の分析と合致することが明らかになった。理論的研究と言語接触の研究は独立して行われることが多いが、本研究はこの2つの流れが合流する方向性を示した。

所有名詞の語順変化の研究では、これを文レベルでの語順変化と平行的に分析した。文レベルでの語順変化が動詞上昇の消失により発生したという先行研究があり、ここでは元は動詞上昇の結果、動詞初置の語順を得ていた言語が、動詞上昇がなくなった結果、動詞中置の語順となったと分析している。これを拡大して、所有名詞の語順変化は名詞上昇の消失によると分析した。つまり名詞上昇により主要部名詞 所有者の語順の語順となっていたものが、名詞上昇の消失により所有者 主要部名詞の語順へ変化したと分析した。

これと関連して、言語接触の影響が、文レベルと名詞句レベルでどう違うか、という問題を追求した。元來動詞初置型のオーストロネシアが SVO になったのは、主語中置型の言

語との接触が原因だという説があるが、名詞レベルでは、西インドネシアと東インドネシアでは状況が異なる。西インドネシアでオーストロネシアが接触したと思われる言語は、現在の東南アジアの言語から推測すれば、オーストロネシア祖語と同じ主要部 所有者の順序を持つ言語であり、語順の変化を引き起こさなかった。これに対し東インドネシアで接触した言語はパプア言語であり、これは所有者 主要部なので、言語接触による語順変化が起こったという仮説に支持を与えた。

連用形の研究では、課題は通時的視点と複合語であった。つまり動詞活用で音便を起こす連用と起こさない連用形の違いの考察や、複合語の前項の連用形の考察である。近年日本語とアルタイ諸語との比較動詞形態論の研究が発表されたが、ここで重要となるのは、何が系統的継承で、何が言語接触によるものか、ということである。件の研究では詳細な論証のもと、この2つを峻別し、系統的継承を証明しているが、裏を返せば、日本語の形態論の起源を考えることは、必然的に言語接触とは何かを考えることと不可分であり、今後の日本語研究が、言語接触の研究に寄与する可能性を見出した。

助動詞の研究では、The Final-over-Final Constraint (FOFC)という原理の例外に着目した。この原理は動詞に関しては[V O] Aux の語順を普遍的に排除するが、ラマホロト語ではこれが可能である。通言語的に当てはまる FOFC が、言語接触において違反できるとなれば、どの程度、そしてなぜ普遍文法に違反できるのか、ということが問題となる。問題提起の段階から進むことはできなかったが、今後も考察を継続する。

助動詞のもう1つの研究では、状況判断 (evidentiality, 'seem'の意味に相当) の助動詞の分析を行った。ここで特徴的なのは、補文の主語の位置で復元代名詞 (resumptive pronoun) の出現が主語上昇の軌跡 (痕跡) を示すと考えられ、複文の構造が動機付けられることである。また、近隣のムナ語では複文構造が一致 (agreement) によって明示される。主語上昇があると思われる主節 (助) 動詞は、補文の主語と一致を示すが、主語上昇がないと思われる主節 (助) 動詞は、デフォルトの3人称単数の一致が出る。これは、一致が複文構造の種類 (上昇構造か否か) を明示していると分析できる。代名詞と一致は文法化の過程で密接に関連していて、ラマホロト語とムナ語を含む東インドネシアの言語が、パプア言語との言語接触の影響を受けている部分である。これまでの研究で、助動詞の位置がパプア言語の影響を受けていることはわかっているが、助動詞を含む複文構造が反映される方法として、代名詞と一致の2種類があることは興味深い。言語接触の状況の違いが要因かどうか、まだ不明であるが、もしこの可能性があれば、言語接触による統語変化に新たな示唆を与えることになる

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

Kunio Nishiyama, Possessive nominal phrases in Lamaholot. In Kunio Nishiyama et al. (eds), *Topics in Theoretical Asian Linguistics*, John Benjamins, 査読有, 2018, 207-225.

Kunio Nishiyama, Phrasal compounds in Japanese, *Further Investigations into the Nature of Phrasal Compounding*, 査読有, 2017, 135-166. DOI: 10.5281/zenodo.885125

西山國雄, ラマホロト語の助動詞の語順、小川芳樹・長野明子・菊地朗(編)、『コーパスから見る言語変化・変異と言語理論』、査読有、開拓社、2016、345 -351.

Kunio Nishiyama, The Theoretical Status of Ren'yoo (Stem) in Japanese Verbal Morphology,

Morphology 26, 査読有, 2016, 65-90. DOI:10.1007/s11525-016-9280-9

西山國雄、日本語の句複合、西原哲雄・田中真一(編)、『現代の形態論と音声学・音韻論の視点と論点』、査読無、2015、78 -95.

〔図書〕(計1件)

Kunio Nishiyama, Hideki KIshimoto, and Edith Aldridge (eds), *Topics in Theoretical Asian Linguistics*, John Benjamins, 査読有, 390 pages, 2018.

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。